

李忠澁氏の「近世における楠正成伝説の出現と展開—英雄伝説の受容と変貌をめぐる基礎的研究—」は、一四世紀に活躍した武将・楠正成およびその一族と家臣のイメージが、江戸時代の通俗文芸と芸能を通してどのように捉えられ、文学を中心とする言説と共にどのような変貌と拡充を遂げたかを考察する。従来変化に乏しいと見なされてきた正成伝説の多様な展開と、同時代におけるその文学史的意義を新たに検証することを目的とする研究である。

楠正成の事跡をめぐる『太平記』の記述は、中世末期から近世初期に成立するいわゆる太平記評判によって大きく書き替えられ、拡充した。太平記評判とは、歴史書『太平記』の本文を提示しながら、『太平記』に含まれないさまざまな伝承と人物評判をこれに付与して講釈種に仕立てたテキスト群である。正成について、とくに後醍醐天皇に対する忠烈のふるまいと、戦において発揮し得たとされる智略について大幅な脚色がなされている。太平記評判の大成として『太平記評判秘伝理尽鈔』という大部の書物が江戸初期に刊行されると、正成伝説は武家社会に向けた教訓という枠組みを超え、同時代に上方で進展した土佐浄瑠璃や浮世草子など通俗文化の中へと取り込まれ、独自の展開を見せる。

本論は近年、政治思想史と芸能史のなかで蓄積された太平記評判に関する先行研究を出発点として、『理尽鈔』の流通を前提とした多岐にわたる文芸ジャンルを丹念にたどり、それぞれのジャンルに適した手法によって考察を加えることを主眼とする。これによって、近世文学ないし芸能研究から全く見落とされてきた豊富な新知見と解釈の可能性を掘り下げること成功しており、今後の近世文学研究に対し、本質的な示唆を多々与えるものと考えられる。

本論文は、本論二部の合計四章および「はじめに」、「序論」、「終論」、「図表」から成る。以下、本論文の構成にしたがって、内容の概略を述べる。

「はじめに」では、正成をめぐる歴史的評価と表象の過程を先行研究に即して俯瞰した上で、本論の主旨について述べている。「序論」では、『太平記』の正成像の特徴を正成の出自、軍学の奇才としての活躍、そして「湊川の戦い」にみる敗死の文脈を分析することで、正成像の淵源にひそむ忠臣とアウトローという二面性を浮き彫りにする。以後二百数十年にわたる伝説化の方向性を強く規定する基本的な構図を明らかにする本論の導入部として機能している。

第一部「正成伝説と『太平記読み』」は、第一章「『太平記読み』の形成と『理尽鈔』の正成伝説」と第二章「『評伝』によって創り出される『理尽鈔』の文学性」の二章から成る。第一章では、『太平記』そのものではなく『理尽鈔』など後世の太平記評判が正成伝説の伝播にいかに関与したかという道筋を示している。具体的には、近世初期に太平記読みが軍談など舌耕文芸の一種として定着するにつれて、武士階級から脱落した浪人を中心とする専門の講釈師が各地に現れた。ここで『太平記』の世界を身分の低い社会階層に向けて初めて広めるという歴史的背景が論じられている。『理尽鈔』講釈がどこでどのように演じられ、どのような素材を用いて構成されたかなどを確認することによって、正成伝説の流布を時間と空間という二次元から見通すことに成功している。その上で、第一章の後半において、『理尽鈔』から創り出された正成の周囲人物に目を向け、近世独自の物語としての展開を鋭く指し示している。

その人物とは、身分こそ卑しいものの、どのような状況にあっても泣くことができる、「泣き男」の異名をもつ杉本左兵衛という侍である。杉本は敵陣に送り込まれ、泣き芸を活かして敵をあざむき、正成勢を有利に導くという手柄を立てるが、同輩に疎んじられ、落伍する寸前に正成の評価を得、家中に取り立てられるという出世話を基本形とする物語である。自らも低い地位から天皇の側近に用いられたという正成像と相重なり、その特質を増幅させる効果を上げると同時に、正成がもつ人材掌握の才能と論功行賞に対する武将の深謀遠慮という重要な属性を補う機能を担っていると李氏は指摘する。知謀と機略に長けた指導者を際立たせる脇役として現れる杉本左兵衛は、後続の小説と演劇に頻繁に取り上げられ、その過程で泣き女、あるいは笑い男、笑い女というようにかたちを転換させるが、物語の基層において正成が為政者として示す美德に重点がおかれていることに変わりはない。この泣き男譚に関する先行研究は皆無であり、李氏は、ここで初めて体系的な調査と分析を行うことによって著しい成果を上げていると言える。本論中、白眉の一節である。

第二章では、まず近世初期に書かれた謡曲・古浄瑠璃および土佐浄瑠璃を精査して、各ジャンルに見られる『理尽鈔』の受容様態を明らかにする一方で、初期芸能における正成伝説の傾向を分析した。謡曲では恩地左近太郎や杉本左兵衛など『理尽鈔』にのみ登場する人物が描かれることが多いが、浄瑠璃では『太平記』と『理尽鈔』の内容を適宜融合させながらストーリーを展開することが見られ、その状況の分析から、たとえば土佐浄瑠璃「楠湊川合戦」において、従来作者の創意と見なされた部分が、実は『理尽鈔』からの借用で成り立っていることを突き止めている。その上で、『理尽鈔』の「伝」と「評」から、正成の兄弟や子孫などをめぐる異伝・外伝を抽出して、浮世草子における「忠臣」正成像から離れた楠家の物語を精緻に描いている。

第二部は、第三章『世界』としての『太平記』と「忠義」をめぐる正成伝説の裏面」と、第四章「近世発生の実録体小説と正成伝説の結合」から構成されている。第三章では、時代物浮世草子を取り上げ、正成が、遊廓で太鼓持ちになるという当世のパロディ化を共通趣向とする系譜をたどり、分析する。また仮名草子に始まる正成の妻を主人公とするいわば「女楠モノ」を丹念に整理し、時系列に沿ってその展開を追う。第四章は、写本として流布した実録体小説の主筋に、正成伝説が融合するという近世独自の物語手法に新たな光を当ててその意義を問う。末尾には終論「近代における正成伝説の変容」を付す。頼山陽の『日本外史』と福沢諭吉の『文明論之概略』を取り上げ、正成が、幕末には尊王攘夷の象徴、明治期には忠孝一体という国家的イデオロギーを体現する歴史人物として変容するその過程を示し、本論のまとめとした。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からは『太平記』および『理尽鈔』を扱う際に、書誌学的検討を一層徹底させるべきであること、近世初期に比して後期に当てられた考察が総じて作品論に傾き、時代が俯瞰できない構造になっていること、そして「終論」そのものが、幕末・明治日本に関する言語文化論として方法面、記述面両方に不十分な側面を多々含んでいるという問題点があげられた。ただし、以上は、本論文が持つ優れた学問的価値を損なうものではないことも同時に確認された。よって本審査委員会は、李忠満氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するに相応しいものであると認定することに、全員一致で合意した。